

Boothの‘philosophy’と‘Christian philosophy’ — *Amelia* について

雲 島 悦 郎

H. Fielding (1707—54) の *Amelia* (1751)⁽¹⁾ は、同じ作者の *Tom Jones* (1749) などと同様、一口で言えば Christian humanism⁽²⁾ の思想が土台になっているが、前者には後者などよりも一層明確にそうした特色が打ち出されている。それは一つには、作者のキリスト教信仰の重大性に対する認識が深まったためだと思われる。⁽³⁾

Amelia の主人公 Booth は、中味はともかくも 自他共に認める ‘philosopher’ である。例えば、債務者拘留所における彼と自称 Stoic との次の対話にもこれがよくあらわれている。

The gentleman [the Stoic] . . . cried, “Indeed, captain, you are a young philosopher.”

“I think,” cries Booth, “I have some pretensions to that philosophy which is taught by misfortunes, and you seem to be of opinion, sir, that is one of the best schools of philosophy.” (VIII, x)

こういう彼は妻 *Amelia* の ‘philosopher’ の面は余り評価していないけれど、⁽⁴⁾ 彼女はそういう面はともかくも信仰者としてはその鑑のような人物として描かれている。⁽⁵⁾ そして彼女は夫が無神論者とさして変わらないことを大いに心配している。⁽⁶⁾ その彼女を、幼い頃から「我が娘」と呼んで慈しみ薫陶して来た Dr. Harrison は村の教区牧師であり、Booth と *Amelia* が結ばれるのに尽力した人でもあるが、この Dr. Harrison が

‘Christian philosopher’ と称し得る人物であることは、⁽⁴⁾ 正に彼が Booth と Amelia の両方の特性を兼ね備えているということで、そこには allegorical な構図さえ浮かびあがってくる。

‘Christian philosopher’ を人間の高度に発達した姿とすれば、成長とか進歩とかいう点から見ると、既に申し分のない Christian であり、それ故静かな存在の Amelia よりも、彼女の方にひかれて変って行く動的な Booth の有様が一段と興味深くうつとも言える。従来、この作品の真の主人公は誰かということに関し意見が分かれていたが、⁽⁵⁾ 作品のどこに力点をおくかによって自ずと見方が違って来る。本論は上記のような観点から、Booth の変化を追うことに主眼をおくので、どちらかと言えば Booth を作品の中心人物と見る立場に立つ。

作者は ‘Christian philosopher’ を人間のあるべき最高の姿と考えていると述べたが、Booth はそれにはまだ程遠い。けれども作者は、Booth は随分ましな方だと看做するだけの現実的な視点も持ち合わせている。そして概して、作者の現実的な視点は語り手によって代表されるのに対し、理想主義的な視点は Dr. Harrison によって保持される。こうして読者は、Amelia の中で、大きく分けて二つの判断基準で物事を見ていくことを要請される。そして、これは Christian humanism の構造とも重なっている。Booth 夫妻は、理想の観点からすれば少々問題はあるけれど、寛大な語り手の観点から判断すれば、物語の冒頭の部分にあるように、やはり ‘worthy couple’ には違いないという具合に見ていくべきである。⁽⁶⁾

陸軍将校の Booth と Amelia は、Amelia の母親の反対等の困難を乗り越えて、利害によらず愛情で結ばれた。⁽⁷⁾ 彼が属していた中隊が整理されたために、彼が半給の身になると、Dr. Harrison が彼等のその後の生活のことを慮り、農場経営を勧める。一時は順調に行くかに見えた彼等の農業生活も、Booth の気位のせいで自家用馬車などそなえたばかりに、近所の農民の反感をかい、それがつまづきの元になり、終に農場経営に失敗する。借財を負い、追われるように村をたち、執行吏の手を逃れるためロン

ドンの the verge of the court⁶⁰⁾ の一面に身を隠す彼は、当時言うところの shy-cock である。

物語はこの辺りから始まって、その後一時過去に遡り、また元に戻る。ロンドンに出るまでのこの夫婦の行動を見ると、二人はこのような失敗にもかかわらず、世間一般の水準からすればやはり 'worthy couple' と呼んで差し支えない。しかし、そんなことよりも、むしろそれ以上に、彼等がこのような失敗にもめげず、又その後の苦難にもへこたれず立ち直っていくからこそ、語り手は彼等を 'worthy couple' と呼ぶのであり、こちらの方にずっと重きをおいて読まなければならない。

語り手によれば、人の運命を弄ぶ超越的存在 (Fortune) などは実際はおらず、人の成功・失敗はこの世界内の因果関係で十分説明がつくという。従って、人生は例えばチェスとか詩・彫刻にも比すべきであり、人生を築いていくのは、当事者の技量にかかっていると言う。⁶¹⁾ この 'the Art of Life' 論は作者自身の考え方としてよく言及されるが、そのために過不足なく作者の考え方の全てでもあるかのような印象を与えがちだ。実際は、自然的因果で事物を説明するのは、作者の考え方の特徴をなす大きな条件ではあっても、決して十分条件ではなく、作者自身は、自然の法則とは矛盾しない形で、運命の女神 (Fortune) とは別の超越者の存在 (Providence) を信じており、事の成否は全て当人の技量次第などという楽観論は決して持ち合わせていない。それでも「人生術」論が表面に出てくるのは、*Amelia* では特に一度人生に失敗した者の生き方に焦点を合わせているからである。社会には、人々を失敗に引き込む悪弊が満ち満ちており、それゆえ失敗には多少同情の余地もある。しかし責任を全てありもしない運命に転嫁し、絶望の淵に沈んだり、自暴自棄になり地道な努力を怠って、人生の敗残者となっていくのは嘆かわしいことである。これを防ぐために「人生術」論が展開されているという特殊な事情が見落とされて、これのみが重要なテーマと取られてはならない。

物語が始まって間もなくのこと、ロンドンの街を歩いていた Booth とい

う妻子ある若者がいざこざに巻き込まれ、法の裁きを受けるべく拘留中の身であることを知らされる。丁度 *TJ* 中の正義漢 Tom 同様、人の難儀を見てぬ振りをしておれぬ性格ゆえに、一人の男が二人がかりでいじめられているのを目撃して止めに入ったのがもとであった。Booth は都合三回も「牢」に入れられるので、「牢」は彼の思想の閉塞状態とかを象徴するものとか指摘されるが、⁶⁸ 本論の観点からすれば先ず人生の落伍者の吹きだまりを象徴する重要な image でもあり、これが作品の冒頭あたりに出てくるのは実に効果的である。

不公正極まる裁判が終り、有罪の身として実際の牢に移った時、彼はそこで様々の囚人と出会う。中には社会悪の犠牲者としてか言いようのない痛ましい姿もいくつか認められるが、おしなべて意外と陽気である。しかし、それは彼等がやけ (desperate) になっているに過ぎないからである。彼はその中でも幾らかましな方の数人と言葉を交わすことになるが、そういう形で彼自身の考え方と同時に、彼等失敗から立ち直れそうにもない者達の考え方の特徴が浮き彫りにされていく。そして Booth (それに Amelia) の立派さは、時には絶望に陥りそうになるが、それでも、‘absolute despair’ とは無縁であり、⁶⁹ 希望を捨てずに困難に直面していくことだという考えの組み立てが読み取れる。⁶⁹ *Amelia* に ‘hope’ とか ‘despair’ という語が頻出するのもこういう事情によるのである。

彼は、牢に入った時、そのしきたりに従ってつる金 (garnish) をせびられるが、⁶⁹ それを持ち合わせていないことがわかると、かわりにコートを剥ぎ取られてしまう。このひどい仕打ちに対する彼の対応の様は次のように表現される。

Mr. Booth was too weak to resist and too wise to complain of this usage. As soon, therefore, as he was at liberty, and declared free of the place, he summoned his philosophy, of which he had no inconsiderable share, to his assistance, and

resolved to make himself as easy as possible under his present circumstances. (I, iii)

この‘philosophy’の意味は前の場合と同様忍耐力であって、彼が‘philosopher’であると言っても、先ず忍耐力を有するということである。そして、彼のこの面はそれなりに評価されているが、それと同時に、その経験主義の限界が克服さるべきものとして暗示されている。

彼が最初にその「哲学」を拝聴するのは、Robinsonという囚人である。彼の考えは次の一節によく示されている。

“I perceive, sir, you are but just arrived in this dismal place, which is indeed rendered more detestable by the wretches who inhabit it than by any other circumstance; but even these a wise man will soon bring himself to bear with indifference; for what is, is; and what must be, must be. The knowledge of this, which, simple as it appears, is in truth the height of all philosophy, renders a wise man superior to every evil which can befall him, I hope, sir, no very dreadful accident is the cause of your coming hither; but whatever it was, you may be assured it could not be otherwise; for all things happen by an inevitable fatality; and a man can no more resist the impulse of fate than a wheelbarrow can the force of its driver.”(I, iii)

Robinsonの考え方は、耐えるということを根幹としているから、Boothのものに似ているようだが、実際はRobinsonの場合、忍耐力というよりも諦めと呼ぶにふさわしく、全てを宿命と受けとめてそれに甘んじているだけである。そして、Robinsonの見解にBoothのが対置され、両者の類似点と相違点が明らかにされる。BoothはRobinsonに対し次のような内容の返答をする。

... [Booth] declared himself to be of the same opinion with regard to the necessity of human actions, adding, however, that he did not believe men were under any blind impulse or direction of fate, but that every man acted merely from the force of that passion which was uppermost in his mind, and could do no otherwise.

ここに明らかなように、Boothは‘the necessity of human actions’を認める点ではRobinsonと同じだが、‘blind impulse or direction of fate’などは信じない点で全く違う。Boothは、人間は全て外なる‘fate’よりも、むしろ内なる最も勝った感情の力に従って行動するものだと反論するのである。⁶⁹ このように、Boothが宿命の存在を認めるfatalismに陥っていない所に彼の救いようがあるが、又‘passion’を絶対とする所に等しくnecessitarianismの弱点が認められるのである。

次にBoothは一人のmethodistと話をする。Fieldingのみならず、当時の多くの作家が、その形式主義や熱狂主義等のゆえにmethodistを嫌った。Boothはその懐疑主義的な思考法(doubting)⁷⁰ゆえに、神慮なるものを信じない点ではmethodistに形の上で劣る。Boothの会ったこのmethodistも、いかにも彼等の教義にふさわしい次のような科白を吐く。

... “I am sorry, sir, to see a gentleman, as you appear to be, in such intimacy with that rascal [Robinson], who makes no scruple of disowning all revealed religion. As for crimes, they are human errors, and signify but little; nay, perhaps the worse a man is by nature the more room there is for grace. The spirit is active, and loves best to inhabit those minds where it may meet with the most work. Whatever your crime be, therefore, I would not have you despair, but rather rejoice at it; for perhaps it may be the means of your being called.” (I, iv)

この methodist, 絶望しないという点では Booth と同じだが, Booth なら本当に罪を犯せば, それを悔いるだけの良心を持っているし, 徳という名称は認めないものの, 徳の実体の価値は認めているのに, その点 methodist は全然違う。Booth は自らの危険も顧みず, いじめられている男を救おうとしたし, 他にも軍人としての勤め振りも立派だったし, 友情にも厚く, ある時点までは家庭人としても結構立派だった。Booth は幸いなことにこれまでの所は心のままに行動してもたいして道を外れぬ人間だったとも言える。一方 methodist は, 現世の行いにかかわりなく, 否それどころか悪人程救われると信じており, これは善行を積むことなしに天国の門をくぐることは困難だとする作者自身の考え方⁶⁸とも真反対である。Booth は天命など信じないが, methodist は人事を尽すことを知らないのである。

次に, Booth は不思議な縁で, 昔なじみの Miss Matthews とこの牢で再会し, 長々と話し込むことになる。まず Miss Matthews がそれ迄に彼女の身に起こった諸々のことを話し, そのお返しに彼がまた長々と彼の身の上話をするという形で, 物語は一時過去に遡っていく。その過程で, 彼女も Booth と同様に感情の力の信奉者だけれど, Booth と違って明らかな宿命論者であることが判明する。しかし彼女は宿命に甘んじるのではなく, それに破滅的な闘いを挑む激しきを持つ。⁶⁹そしてこの二人は, 感情の中でも, この時特に優勢であった 'love', それも歪んだ愛に駆り立てられて, 終にわりない仲になっていく。この二人の対話の中で, Booth は Mandeville (作品の中では Mandevil) の思想について次のように言う。

“Pardon me, madam,” ... “I hope you do not agree with Mandevil neither, who hath represented human nature in a picture of the highest deformity. He hath left out of his system the best passion which the mind can possess, and attempts to derive the effects or energies of that passion from the impulses of pride or fear. Whereas it is as certain that love exists in

the mind of man as that its opposite hatred doth; and the same reasons will equally prove the existence of the one as the existence of the other.” (III, v)

彼は、ここでは Mandeville の考え方を一応否定しながら、後の Amelia との対話では、次のように部分的に Mandeville に同調したような発言をする。

“I have often told you, my Emily,” . . . “that all men, as well the best as the worst, act alike from the principle of self-love. Where benevolence therefore is the uppermost passion, self-love directs you to gratify it by doing good, and by relieving the distresses of others; for they are then in reality your own. But where ambition, avarice, pride, or any other passion, governs the man and keeps his benevolence down, the miseries of all other men affect him no more than they would a stock or a stone. And thus the man and his statue have often the same degree of feeling or compassion.” (X, ix)

彼のこれら二つの発言に辻褃を合わせるならば、Booth も Mandeville 同様、自己愛が人間を一番支配していると信じているが、Mandeville と違うのは、人間には他者を愛する力もあると信じているということになる。後の方の引用文の前半部についてであるが、作者が賛同する Barrow などの latitudinarian の考え方で重要なものの一つに self-approving joy⁶⁴ があるけれど、これを頭において読み直して見ると、案外 Booth の言っていることはそれに近いことがわかる。この後半部では、木石の如き人間即ち Stoic は感情に左右されていないのではなく、‘pride’や‘avarice’といった別の感情に支配されているという興味深い解釈を示しているが、これは Colonel James という Stoic について述べる時の語り手の Stoicism の解釈と余り違わない。

In truth, the colonel, though a very generous man, had not the least grain of tenderness in his disposition. His mind was formed of those firm materials of which nature formerly hammered out the Stoic, and upon which the sorrows of no man living could make an impression. A man of this temper, who doth not much value danger, will fight for the person he calls his friend, and the man that hath but little value for his money will give it him; but such friendship is never to be absolutely depended on; for, whenever the favourite passion interposes with it, it is sure to subside and vanish into air. Whereas the man whose tender disposition really feels the miseries of another will endeavour to relieve them for his own sake; and, in such a mind, friendship will often get the superiority over every other passion.

(VIII, v)

Stoicとは諸々の感情を全て欠いているのではなく、‘tenderness’又は‘tender disposition’⁶³⁾とか‘compassion’という同胞に対する思いやりの全く欠如した人間に他ならず、その点Boothは感情絶対視という過ちは犯しているものの、作者の考えと決してそう遠くない所まで来ていると言える。

前にも述べた、Boothが債務者拘留所で会ったStoicは、哲学とは単に正邪の区別を知ることではなく、活力であり、習慣であって、この哲学が身につけていればどんな不運にもめげないと公言する。⁶⁴⁾ Boothはその内容には全く賛成だけれど、「理屈は頭で考えるが、行動は心からするものだ」⁶⁵⁾という観点から、その実行の可能性を訝る。と、案の定この男は、そう言った舌の根もかわかぬうちに、自分がニューゲイト監獄送りに決まったと知らされるや、あわてふためく始末である。これはよくある言行不一致の例であり、結局この男は口で言う程Stoicでもなかったという具合にも解釈できるが、この男の‘pride’に注目すると、丁度色欲という感情

に支配されている James が Epicurean ではなく Stoic と呼ばれるように、彼もやはり ‘pride’ という悪しき感情に支配された Stoic に違いないという見方もできる。作者は感情一偏倒の姿勢にも否定的だが、感情、それも思いやりの気持ちの欠けた人間に対してもまた否定的であり、Amelia においては一貫して Stoicism に対する揶揄のようなものさえ感じられる。⁶⁵ 丁度 TJ で作者が prudence の重要性を訴えようとしながらも、そのいびつなものを多く取りあげたように、⁶⁶ Stoicism の持つ平静とか忍耐とかいった側面の人生における重要性を意識しながらも、そのいびつな面を多く取りあげていると言えよう。

これで Booth の物の見方、考え方の特徴はあらかじめ出揃ったと思う。彼の長所は、人間は他者を愛し得ると思っていること、それゆえこの点でも徳の存在を根本的に否定しているとは言い切れないこと、そして自己の人生の責任を ‘fate’⁶⁷ というありもしないものに負わせないこと、それに人生に前向きで希望を捨てないことなどがあり、一方欠点と言えば、自己の内なる感情の支配を絶対化し、神慮(Providence)を信じないことである。これに、現世を絶対化し、来世とか魂の不滅を信じないことを付け加えればよからう。そこで読者の最大の関心事は、彼がいかにかこの長所を踏み台にして、弱点を克服し、人間的成長を遂げるかということである。彼が社会の仕組みや自分の思想ゆえになめる辛酸の中で、経験を通じていかにより高い真理に到達するかが見物である。また、その手助けをする者がいるとしたら、それは誰かということも興味深い。Amelia は夫 Booth の無神論的傾向を常々心配して、彼が一度 Dr. Harrison と信仰の問題で話し合ってくれたらと思っている。⁶⁸ だから最初に述べた Christian humanism の構造から言っても、Dr. Harrison が Booth の回心において何らかの重要な働きをすると予想したくなるが、それはどうも見事にはぐらかされてしまう。実は Dr. Harrison は Booth が信仰の問題で疑問を抱いていたことも知らなかったし、⁶⁹ また手助けをする機会も実際には与えられなかった。この点、JA で Joseph が始終 Adams 牧師に説教され、TJ で Tom が何度

か Allworthy にさとされたのとは趣きを異にする。と言っても、Adams はまだしも、Allworthy がこと信仰に関して相手を大きく変える程感化したとは思われない。彼等のようなタイプは、素直に聞いて頭から信じてくれる者には影響力を発揮するが、Booth などのように懐疑的思考の持ち主には余り影響力を持たないだろう。Booth は Dr. Harrison が或る青年貴族のお伴で大陸旅行に出掛け、身近にいなくなったことを、自分達の失敗の原因の一つと見て次のように言う。

“By this means I was bereft not only of the best companions in the world, but of the best counsellor; a loss of which I have since felt the bitter consequence; for no greater advantage, I am convinced, can arrive to a young man, who hath any degree of understanding, than an intimate converse with one of riper years, who is not only able to advise, but who knows the manner of advising...” (III, xii)

Dr. Harrison が果して「忠告の仕方を知っている」人物かどうかは、次の Booth との対話とも関連し、その判断は微妙である。

Booth は三度目に投獄された時、獄中で latitudinarian の Dr. Barrow の説教集を読んでから、自らの迷いがふっ切れて、信仰に目覚めたと告白し、次のように言う。

“... Indeed, I never was a rash disbeliever; my chief doubt was founded on this — that, as men appeared to me to act entirely from their passions, their actions could have neither merit nor demerit.” (XII, v)

Booth の懐疑の根には二つの誤りがあると思われる。一つは、人間の行動は全て感情に由来するという見方であり、もう一つは、強固な意志からではなく感情に発する行為はどんなに立派でも徳の名に値しないという考

えである。後者は、Stoicism と同一系譜の rigorism の立場を反映するもので、⁶⁰ 作者はこのような理性一辺倒の立場にも疑問を持っていた筈だ。

Booth への返答として Dr. Harrison は読者をやや戸惑わせる次のような発言をする。

“A very worthy conclusion truly!” cries the doctor; “but if men act, as I believe they do, from their passions, it would be fair to conclude that religion to be true which applies immediately to the strongest of these passions, hope and fear; choosing rather to rely on its rewards and punishments than on that native beauty of virtue which some of the ancient philosophers thought proper to recommend to their disciples. But we will defer this discourse till another opportunity . . .” (XII, v)

Booth が Barrow の説教集を読んだと聞いた時、Dr. Harrison が直ちに Booth 共々 Barrow の説教を賛美したことにあらわれているように、感情を重視した latitudinarian 達と彼はほぼ同じ見地にあるのだから、この言葉は内容としては自然に思えないこともないが、この文脈のやり取りとしては今一つ噛み合っていないという印象も否めない。⁶¹ テーマ上の重要性からも、同じことを指摘するにせよ、Dr. Harrison にはここで是非とも Booth の従来感情絶対視を一言たしなめた上でして欲しい所ではなかろうか。ところが、Dr. Harrison の言葉からは ‘entirely’ という語は抜けているものの、それは相手の言葉に乗っかった形で一気に弁証法的に高まったものになっている。これは、彼の論法の特徴ではあるが、相手の Booth に通じるかどうか至って心もとない。それとも、Booth が感情絶対視の誤り故に犯した最大の過ちが、Miss Matthews との浮気であり、彼はそれでいやという程懊悩したのだから、今更彼の誤りを悟らせる必要はないと作者は判断したのだろうか。結局 Booth が Barrow の説教のどの辺りに共鳴したかも具体的には一切明らかにされないから、Booth がどのよう

に考えを改めたのかもやむやである。⁶⁸ もう少し二人の対話が続けばもっとはっきりするだろうが、続きは又の機会にということで Dr. Harrison の方から話を打ち切ってしまう。そして、その機会は二度と訪れない。だが、この話の続きらしきものが、一つ高い次元で全く別の形をとって作品中に展開している。

‘religion and virtue’ という句が作品中に数回出てくるが、これは徳というものが哲学の次元だけで語られるものではなく、宗教に支えられて存立するということを示していると考えられる。それ故、哲学と宗教を抱き合わせて徳を考え、その意味を掘り下げる必要があるが、語り手自身がそれをやるのでは余り面白くない。Dr. Harrison が適役の一人なのは間違いないが、誰か相手が欲しい。それには改宗したばかりの Booth では荷が重すぎる。そこで選ばれたのが、一人の青年牧師である。そして彼等二人の討論という形で、徳が哲学と宗教との結びつきの中で論じられていく。その過程で、作者の考える ‘Christian philosophy’ や、その他作品における重要なテーマが明確にされていく。

この青年は大学を出て、Dr. Harrison の肝入りで聖職に就いたばかりである。父親に付き添われて、田舎から、ロンドンに来ている Dr. Harrison の所に挨拶に出向いている。この青年は ‘pride’ に毒されているし、何事においても一方的な見方しか出来ない。そのためいつしか信仰の正道を外れてしまう所があるので、Dr. Harrison は、この青年の性格を知っていたら、彼など推薦するのではなかったと面と向って相手をなじる程である。⁶⁹

Dr. Harrison の考え方は、この青年との議論の中で明らかにされるが、その特徴は、前の Booth への応答に見られたように、諸々の対立物のどちらか一方を決して簡単に絶対化しないで、弁証法的に高めていく姿勢である。その ambivalent とも言える態度こそ、当時の思潮で目立ったものであった。そして、Dr. Harrison の折衷的な思想を端的に表わせば、それは Christian humanism であり、作品中に出る ‘Christian philosophy’ に他ならない。これから、二人の議論を追って、その中味を具体的に見てみるこ

とにする。

議論のきっかけは、青年の父親が、慈善を施すにも、それが無駄にならないよう、相手を選ぶべきだという趣旨の発言をしたので、この俗物と Dr. Harrison との間に次のようなやり取りがあったことだ。

“I remember,” cries the doctor, “Phocylides saith, ‘To do a kindness to a bad man is like sowing your seed in the sea.’” But he speaks more like a philosopher than a Christian. I am more pleased with a French writer, one of the best, indeed, that I ever read, who blames men for lamenting the ill return which is so often made to the best offices. A true Christian can never be disappointed if he doth not receive his reward in this world; the labourer might as well complain that he is not paid his hire in the middle of the day.”

“I own, indeed,” said the gentleman, “if we see it in that light——”

“And in what light should we see it?” answered the doctor. “Are we like Agrippa, only almost Christians? or, is Christianity a matter of bare theory, and not a rule for our practice?” (IX, viii)

ここで Dr. Harrison は、相手が恩に報いるかどうかを考えてから、慈善を行うというのは、キリスト教徒よりも哲学者即ち異教徒の考えにふさわしいと言っている。しかし又、‘almost Christians’ という表現で、異教徒でもキリスト教徒と余り変わらない者がいることを示唆している。Dr. Harrison の考えは要するに分け隔てなくどんな人にも善を施すべきだという謂わば一視同仁の思想だが、これを聞いていた青年牧師は、Homer が *Iliad* に Axylos という人物を登場させ、彼について「彼は人類の友であった。というのも、彼は人類全体を愛したからだ」と述べるけれ

ど、これはキリスト教の教義よりも、むしろ異教徒の考え方で、このようなものは不信心な説として退ける方が‘Christian philosophy’にかなうと言うのである。青年は完全に異教段階のものを切り捨てるが、Dr. Harrisonはそれを中に取り込んで発展させている。だから彼の‘philosophy’は単なる異教水準にとどまるものではなく、あくまでも‘Christian philosophy’であることは断るまでもない。⁶⁹ それでも、この時は少々極論して、全ての人を分け隔てなく愛する Axylus は、異教徒というよりも、むしろキリスト教徒だと Dr. Harrison は言う。Fielding は善きサマリア人と同様、この Axylus という人物も大層気に入っていたようである。⁶⁹

これから、お互い聖句を引用しながら、二人は「敵を愛する」ということについて論じ合うが、キリスト教徒と異教徒の間を完全に断ち切る青年は、また何事にも敵・味方の区別をはっきりさせずにはいられない。それ故、「汝の敵を愛せよ」という教えは彼の信仰にとってつまづきの石(stumbling-block)になっている。⁶⁹ これに関連し、Dr. Harrison は次のような逆説的な論を展開する。

“... you may hate your enemies as God's enemies, and seek due revenge of them for his honour; and for your own sakes too, you may seek moderate satisfaction of them; but then you are to love them with a love consistent with these things — that is to say, in plainer words, you are to love them and hate them, and bless and curse, and do them good and mischief.”
(IX, viii)

青年にはごまかしのようにも響く、このような一方に偏らないバランス感覚に富んだ考え方が、Dr. Harrison ひいては作者自身の考え方の特徴である。‘revenge’とのつながりで話が一般の法とか、それによる処罰の問題に及ぶと、Dr. Harrison は、治安判事が犯罪者を裁き、私人が犯罪者を司直の手に渡すのは当然の義務であるが、犯罪者を単に敵として復讐心か

らこれを行ってはいならないと述べて、更に次のように言葉を続ける。

“...Revenge, indeed, of all kinds, is strictly prohibited; wherefore, as we are not to execute it with our own hands, so neither are we to make use of the law as the instrument of private malice, and to worry each other with inveteracy and rancour...” (IX, viii)

ここの内容は Booth や Bath の行動に深く関わっているのです、後に再度取り上げることにする。

「敵に対する愛」や「復讐」、そして他に「姦淫」も *Amelia* の重要な主題になっているが、これら全てが山上の垂訓の重要な事項であることを考えても、この作品のテーマのキリスト教的色彩の濃厚さが分ろうというものである。

さて、このような Dr. Harrison の観点から Booth を振り返って見る。Booth は自他共に認める‘philosopher’であった。そして、Barrow の説教集を読んで今自分ではキリスト教へ改宗したと思っている。しかし、筋金入りの‘Christian philosopher’である Dr. Harrison と比べれば、Booth はまだひよこ同然である。しかし、Booth は Dr. Harrison と対等に意見を交えようとする程の高慢の罪は持たない。彼が成長・発達を遂げるべき方向は、Dr. Harrison とあの新米の聖職者との討論の中に、大きく示されているが、Booth はそれを聞くこともできず完全にその埒外におかれていた。それ故、*Amelia* で宗教上の重要な事柄の論理的展開がよく分るのは、Booth ではなく、終始語り手や Dr. Harrison の意見を聞いている読者だと言われたりする。⁸⁸ だから、Booth が Barrow の説教集を読んで己の非を悟って信仰についたという設定は作者の安易な逃げで、説得力を欠くという見方も多い。しかし、一般の真理の場合でも、必ずしも理路整然と筋道立った状態で把握するとは限るまい。ましてや、信ずることは理屈ではない。Booth にはかねてから信仰についての問題意識があったのだから、

Barrow の説教集を読んだのをきっかけに、一瞬のうちに何か重要なことに気付かせるものが、既にBoothの経験の中にあったという見方もできる。⁶³ また、作品の次の一節などには、たまたま自分の房にあった Barrow の著作を Booth が気晴らしとか退屈しのぎに読んだのではなく、⁶⁴ 思う所があって積極的に読んだととれなくもない響きがある。

“Since I have been in this wretched place I have employed my time almost entirely in reading over a series of sermons which are contained in that book (meaning Dr. Barrow’s works, which then lay on the table before him) in proof of the Christian religion . . .” (XII, v)

遂に彼は、自己の無力、愚かさに気付き、絶対者の前にひれ伏す気になった。それは当然 ‘Providence’ を認めることで、*Amelia* において大きな意味を持つことは確かである。回心のためには神への服従が先決である。だが信仰が本物になり Booth が成長していくには、latitudinarian の考え方の特徴を考えても、愛の認識が深まることが是非とも必要である。

Dr. Harrison は、宗教に関することは勿論、しばしば一般社会の法とか制度について意見を述べる。そして、この両面で彼は作者の代弁者の役をつとめているが、彼において宗教と一般社会の法のことが結びついているのは、次のような点においても意味がある。Dr. Harrison が指摘するようにキリスト教の教えは神の命令であり、又ただの理論ではなく規則であって、信じ従わなければならない、これだけは絶対的なものだという認識がある。そして、規則を破るものは、この世でなくともあの世で必ず罰せられるという具合に、教義は法的な性格をおびているのである。⁶⁵ こう見ると、Dr. Harrison と例の青年との議論が主に愛と罰をめぐってのものであったのも大いにうなづける。そこで、神の命令としての愛の観点から、Booth の姿勢に検討を加えて見ることにする。

彼は、愛はただの感情だと考えていた。だから、好ましく思える人なら

愛することができる。彼は、自分を愛してくれる家族や友人は深く愛しているし、その限りでは立派である。その彼の愛の認識は、“... Beauty is, indeed, the object of liking, great qualities of admiration, good ones of esteem; but the devil take me if I think anything but love to be the object of love” (V, ix) という言葉に要約される。⁶⁴ この愛は、ただの物欲とか色欲に基づく人間関係を頭におけば、異性愛・夫婦愛・友愛の level ではなかなか立派なものだが、そこにとどまればやはり不十分である。Amelia では友愛が実に大きく取りあげられている。Booth 夫妻に対する Atkinson の愛はその典型である。ところが、その根本の所が怪しい友人 James の「友愛」は徐々に敵意へと無気味な変化を遂げる。現世では敵か味方かの区別がどうしても決定的な意味を持ちがちである。Booth にせよ、とても敵を愛する余裕はない。彼は仇をなした者には復讐せずにはおれない。妻の衣類を持ち去った小間使いの不恩の行為には激怒し、復讐を誓って家をとび出すが、⁶⁵ 既に見たように復讐は神によって禁じられており、私刑は勿論、法によろうとも怨みで人を罰しようとしてはならないのである。しかるに、Amelia では、復讐は決闘という悪習と結びついて更に重大な意味をおびている。

愛はただの感情だと墮落しがちである。James の考えている愛は正に肉欲である。Booth は Miss Matthews に同様の「愛」を覚え、感情の趣くままに、彼女と姦淫を犯す。だが Amelia の最も深刻な姦淫の問題は、彼の妻 Amelia が姦淫の相手として数人の男に狙われることであり、そこに彼等の家庭の最大の危機がある。しかし、Booth が激し易く、物事の決着を簡単に決闘でつけようとする質だということを Amelia は承知しているので、彼女ももうかつに彼に相談できない。⁶⁶ こうして、彼の感情至上主義は徒らに問題をこじらせ、解決を遅らせる。

彼の感情至上主義哲学は、彼が産み出したものではないが、彼自身の人間観察に裏打ちされている。Fielding は Mandeville 達が性悪説をとるのは、己の心を分析したのために他ならないと決めつける所があったが、

Amelia でもそれは同じである。⁶⁴⁾ だが、Booth はその反対に他人の行動から人間性一般を判断する所がある。⁶⁵⁾ それは主に彼の軍隊時代からの友人 James や Bath の行動の観察に基づくものである。彼は James について次のように言う。

“The behaviour of this man alone is a sufficient proof of the truth of my doctrine, that all men act entirely from their passions; for Bob James can never be supposed to act from any motives of virtue or religion, since he constantly laughs at both; and yet his conduct towards me alone demonstrates a degree of goodness which perhaps few of the votaries of either virtue or religion can equal.” (III, v)

Booth には感情によって動かされているとしか見えない James が、語り手によって Stoic と呼ばれるのは前に見た通りだが、確かに James 達の態度は Booth に対しても感情的としか見えない程によく変わる。そして、その変化は諸々の出来事と密接に絡んでいるので、読者にとって、その連鎖の一つ一つの輪を結びつけていくのは楽しいけれどなかなか骨の折れる仕事である。⁶⁶⁾ こんな訳で、彼の感情至上主義哲学は保持されていたが、彼等への信頼感が薄れるにつれぐらつき始め、新しい友（味方）である Amelia や Atkinson の彼に対するいつに変わらぬ献身的な愛を知るに従い、新たな愛の哲学即ち ‘Christian philosophy’ に目覚めていく素地ができるのである。しかし、彼が敵をも愛するに至るまでは、改宗した後もまだまだ時間がかかりそうである。

以上、Booth の「哲学」の特徴を他の人物のそれとの比較の中で具体的に見、それを作者の考えている ‘Christian philosophy’ の中に位置づけ、Booth の「現在」の長所・短所、そして「将来」の可能性がどのようなものと考えられるかを明らかにしようとした。

Booth と Amelia は田舎から海外やロンドンに出掛ける。その限りでは、JA や TJ の主人公達と同様に旅人であり、活動範囲も一応広いことは広い。しかし、Booth 達の交際が特定の範囲に限られているせい、その割に彼等の住む世界は狭く感じられる。⁶⁴ そのためであろう、Amelia でも従来の作品同様、作者は博愛主義的思想を説こうとしているけれど、どうしてもそれより意味の狭い友愛が大きな話題になる。⁶⁵ 友愛は無論否定すべきものではないが、どうしても人を敵と味方に分けるし、利害が絡んでくる。この欠点を補うように、Dr. Harrison がキリスト教的博愛主義を力説するけれど、作品全体の中で彼の意見は観念的過ぎてやはり訴える力が弱い。

Amelia が家庭劇の色彩を濃くして、近代市民の卑近な日常生活を描き、それだけより小説的になった反面、⁶⁶ その分だけ叙事詩的な広がりを持っていったとも言えよう。

信仰に目覚めることによって、人は正しく生きることができるともされない。しかし、社会制度に欠陥があり、悪習がはびこる限り、彼等に真に安穩な生活は望めない。作者は個人の覚醒をまつとともに、制度とか慣習の見直しも強く訴えかけている訳で、そういう面にも当然目を向ける必要がある。

[注]

- (1) テキストは、*The Complete Works of Henry Fielding, Esq.*, ed. William Ernest Henley (Barnes & Noble, rpt. 1967) と Everyman's Library edition を使用した。両者には特に句読法の面でかなりの違いが見られる。本論における作品からの引用は全て Henley edition による。但し、米語式綴りは英語式綴りに改めた。なお、作品名は Amelia を除いて二度目からは全て省略符号を使う。(待望の Wesleyan edition が脱稿の直前に手に入ったが、残念ながら活用するまでには至らなかった。)
- (2) この語を使って Fielding の思想を表わしているのは、調べた限りでは Battestin 位である (Martin C. Battestin, "The Problem of *Amelia*: Hume, Barrow,

and the Conversion of Captain Booth," *ELH*, XLI [1974], p. 616)。Battestinは‘Christian stoicism’という表現もよく使うが、他の批評家の間ではこの言い方が一般的である。

- (3) See F. Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (Archon Books, 1966), II, p. 867, p. 869, and Aurélian Digeon, *The Novels of Fielding* (Russell & Russell, 1962), pp. 212–16.
- (4) ‘...as a divine or a philosopher he did not hold her in a very respectable light...’ (*Amelia*, X, ix).
- (5) ‘[Dr. Harrison] says “... She hath a sweetness of temper, a generosity of spirit, an openness of heart—in a word, she hath a true Christian disposition. I may call her an Israelite indeed, in whom there is no guile.” (*ibid.*, IX, viii). と言っても彼女に信仰心の揺れが全くなかった訳ではない。その微妙な揺れについては、Allan Wendt, “The Naked Virtue of *Amelia*,” *ELH*, XXVII (1960), 131–48を見よ。
- (6) ‘... She [*Amelia*] sometimes apprehended from his discourse that he was little better than an atheist: a consideration which did not diminish her affection for him, but gave her great uneasiness.’ (*Amelia*, X, ix).
- (7) Dr. Harrison から Booth 夫妻に宛てた手紙(III, x)の中で‘Christian philosopher’という語が使われているが、その手紙の内容からしても、Dr. Harrison がその種の人間の典型だと言える。
- (8) *Amelia* が当然の如く *Amelia* の主人公だとするのは、例えば Dudden とか Digeon とか、Wendt であり (Dudden, *op. cit.*, p. 819; Digeon, *op. cit.*, p. 200; Wendt, *op. cit.*, p. 131), そういう見方を一面的だと批判しているのは Robert L. Oakman などである (R. L. Oakman, “The Character of the Hero: A Key to Fielding’s *Amelia*,” *SEL*, XVI [1976], 473–89)。Lyll H. Powers の解釈などは、どちらかと言えば Booth を中心に見たものと言えよう。See Lyll H. Powers, “The Influence of the *Aeneid* on Fielding’s *Amelia*,” *MLN*, LXXI, 330–36. 中には M. Johnson のように、Booth と *Amelia* は二人合わせて一人の主人公のような役割を果しているとする見方もあ

る。See Maurice Johnson, *Fielding's Art of Fiction* (University of Pennsylvania Press, 1961), p. 155. 要するに G. Sherburn も言うように、*Amelia* には多くの意図が込められており、この点においても多様な解釈を許すのである。See George Sherburn, "Fielding's *Amelia*: An Interpretation," *ELH*, III (1936), 1.

(9) 'worthy' という語はいささか褒め過ぎの感なきにしもあらずで、多少の irony も否定できない。が、*Amelia* の irony の問題は、語り手や作者の persona と読者の関係や、主人公達の人物評価とも絡めて論ずる必要があるので、それは別の機会にゆずる。*Amelia* を作品の中心人物とする見方はどうしても Booth を彼女にふさわしくない下らぬ男とする見方につながるが、語り手の言葉通り一応素直に Booth を 'worthy' だと見る立場の代表者は Sherburn である。See Sherburn, *op. cit.*, pp. 1-14.

(10) '...the highest professions of the most disinterested love...' (*Amelia*, II, iii).

(11) the verge of the court については、John C. Stephens, Jr., "The Verge of the Court and Arrest for Debt in Fielding's *Amelia*," *MLN*, LXIII (1948), 104-9, が参考になる。

(12) *Amelia*, I, 1. Cf. 'Human life appears to me to resemble the Game of *Hazard*, much more than that of *Chess*.' (*Champion*, I, 64) cited by D. S. Thomas, "Fortune and the Passions in Fielding's *Amelia*," *MLR*, LX (1965), 12.

(13) See Peter V. LePage, "The Prison and the Dark Beauty of *Amelia*," *Criticism*, IX (1967), 337-54; Battestin, *op. cit.*, p. 617; and Muriel Brittain Williams, *Marriage: Fielding's Mirror of Morality* (University of Alabama Press, 1973), p. 111. 更に、このような閉塞状態に関しては、Morris Golden の *Fielding's Moral Psychology* (University of Massachusetts Press, 1966) にある 'self-enclosure' の考えも非常に参考になる。

(14) '[Booth says] "In this dreadful situation we were taught that no human condition should inspire men with absolute despair..."' (*Amelia*, III, iv); 'Her [*Amelia*'] case, however hard, was not absolutely desperate

- ...’ (*ibid.*, VIII, iii).
- (15) Boothは何ら現状打開のための積極的な行動に出ないという指摘もある。See Sheridan Baker, “Fielding’s *Amelia* and the Materials of Romance,” *PQ*, XLI (1962), 448—9.
- (16) ‘... a number of persons gathered around him, all demanding garnish...’ (*Amelia*, I, iii).
- (17) *Ibid.*, I, iii.
- (18) *Ibid.*, I, iii.
- (19) *A Journey from This World to the Next, &c.* 中の Elysium の入口における Minos の裁きの場面が、作者のこの考え方を端的に表わして有名である。
- (20) ‘“You need not take much pains,” answered Miss Matthews, with a smile, “to convince me of your doctrine. I have been always an advocate for the same. . . .”’ (*Amelia*, III, v); ‘... [Miss Matthews says] “I am at length reconciled to my fate; and I can now die with pleasure, since I die revenged. I am not one of those mean wretches who can sit down and lament their misfortunes. If I ever shed tears, they are the tears of indignation. . . .”’ (*ibid.*, I, viii).
- (21) See R. S. Crane, “Suggestions Toward a Genealogy of ‘the Man of Feeling,’” *ELH*, I (1934), 227ff.
- (22) ‘passion’ と ‘disposition’ の関係については Golden の前掲書を参照。
- (23) *Amelia*, VIII, x.
- (24) ‘[Booth says] “... We reason from our heads, but act from our hearts. . . .”’ (*ibid.*, VIII, x).
- (25) Battestin などのように Fielding の思想を ‘Christian stoicism’ と呼ぶ立場は、Fielding にとっての感情の意味を軽視するきらいがあるが（と言っても彼は上掲論文で Fielding の Hume への相当の接近を認めているが）、逆に Swann などの捉え方はそれを重視する余り Hume の思想に引きつけ過ぎているように思われる (George Rogers Swann, *Philosophical Parallels in Six English Novelists* [Folcroft Press, rpt. 1969], ch. IV, esp. pp. 59—64)。Fielding は stoicism と epicurianism の相方の長所と同時に短所も常に意識していた筈

である。

②⑥ ‘...in *Tom Jones* the words “prudence,” “prudent,” and “prudential” are used unfavorably three times as often as they are used favorably.’ (Eleanor N. Hutchens, “‘Prudence’ in *Tom Jones*: A Study of Connotative Irony,” *PQ*, XXXIX (1960), 496.

②⑦ 本当はここで ‘fate’ のかわりに ‘Fortune’ を使いたいのだが、Booth が ‘Fortune’ の存在を信じているという説もあるので、もっと詳細な論証が必要であるから別の機会にゆずる。

②⑧ “I have often wished, my dear,” cries Amelia, “to hear you converse with Dr. Harrison on this subject; for I am sure he would convince you, though I can’t, that there are really such things as religion and virtue.”’ (*Amelia*, X, ix).

②⑨ “The doctor... added, “You say you have had your doubts, young gentleman; indeed, I did not know that—and, pray, what were your doubts?”’ (*ibid.*, XII, v).

③⑩ Fielding は感情に発するものを徳と認めない立場を他の作品でも再三非難している。See Tuvia Bloch, “*Amelia* and Booth’s Doctrine of the Passions,” *SEL*, XIII (1973), 463–4. 又、rigorism については、Frederick G. Ribble が次のように述べている。‘Rigorism is a more severe form of rationalism than anything to be found in Cicero, although it does represent a natural development of certain Stoic tendencies. The thesis of rigorism is that action done from inclination or natural tendency—however amiable or useful it may be—has no moral worth. Virtue arises, as John Balguy writes, from a “rational Determination of the Mind” or a willed adherence to principle and duty, and involves a struggle with natural impulse.’ (Frederick G. Ribble, “Aristotle and the ‘Prudence’ Theme of *Tom Jones*,” *ECS* [Fall, 1981], p. 30).

③⑪ 本文に引用した Dr. Harrison の言葉にふれて、Allan Wendt は本論とやや観点の違いが、‘This passage has puzzled commentators because it seems to show Fielding turning his back on the native beauty of virtue to

which he has formerly given allegiance. But taken in the total moral context of the book, it does not present so many difficulties. Like Parson Adams, Harrison is often likely to act like a benevolist while he speaks with considerable orthodoxy; he certainly does not need the threat of hell-fire to keep him from wickedness.' という。See Wendt, *op. cit.*, pp. 144-45.

特に感情の問題については、McKillopは 'Booth's error. . . is partly "accidia," or sloth, and partly too narrow a view of the range and possibilities of the passions, which keeps him from realizing how they may be turned to active good.' (Alan D. McKillop, *The Early Masters of English Fiction* [University Press of Kansas, 1956], p. 141) と言うし、Oakmanは 'In answer to Booth's contention, Dr. Harrison speaks for the author in correcting the hero with a Christian interpretation of the theory of passions. . . .' (Oakman, *op. cit.*, p. 483) と言い、特に後者は、Dr. Harrisonの考えは同じ感情主義でも Boothのものより質的に高まっていると指摘する。しかし、この質的違いを無視するかのように、作者 Fieldingが Boothの感情についての考え方に全面的に同意していると敢えて主張するのが Blochである。See Bloch, *op. cit.*, p. 461.

- (32) Dr. Harrison と Booth の話しが噛み合っているとすれば、Boothは Dr. Harrisonの意見を聞く前に、Barrowの説教集を読んで既に Dr. Harrisonの言わんとしたことを良く理解していたととるのが自然である。というのも、Dr. Harrisonの見解の出所は、Barrowの説教集の可能性があるからである。See Battestin, *op. cit.*, p. 634. だが、Barrowの感情観に Boothが共鳴したとしても、Boothが改宗するには、それだけで良かった筈はない。
- (33) “. . . I do assure you, if I had known your disposition formerly, the order should never have been affronted through you.” (*Amelia*, IX, x). なお、Alterはこの青年に固有名詞がないのは、the Noble Lordに固有名詞がないのと同様、この種の人物を象徴的に表わすという。See Robert Alter, *Fielding and the Nature of the Novel* (Harvard U. P., 1968), p. 160. 確かに彼はその種の典型的な人物ではある。但し彼には Tom というれっきとし

た名前が付いている。

- (34) Phocylides の言葉は本文ではギリシア語であり、脚注として英訳がついているが、本論では便宜上差し替えた。
- (35) Cf. 'Mr. Sherburn has certainly come very close to the truth when he defines Fielding's problem in *Amelia* as that of "reconciling pagan ethics (that is, Stoicism) with Christian principles." Perhaps it might be more exact to say that in his last novel Fielding endeavoured to show the superiority of Christianity to Stoicism while still admitting the value of the Stoic ethic.' (Powers, *op. cit.*, pp. 235—6).
- (36) 例えば、*The Covent-Garden Journal* や *VL* にもこの人物への言及がある。
- (37) *Amelia*, IX, viii.
- (38) See Sherburn, *op. cit.*, p. 151, and Leo Braudy, *Narrative Form in History and Fiction* (Princeton U. P., 1970), p. 185.
- (39) Williams は、信仰にとって重大な 'an awareness of [his] inadequacy and of complete submission' が既に Booth に芽生えていたのだから、彼の改宗は不自然でないという。See Williams, *op. cit.*, p. 115.
- (40) 'Booth had been reading while in the roundhouse, no other book at hand, a series of sermons by Dr. Barrow . . .' (Wilbur L. Cross, *The History of Henry Fielding* [Russell & Russell, rpt. 1963], II, 322).
 'Moreover it is nothing in his unfortunate experiences which eventually causes him to alter his view, but a chance reading of Barrow's sermons.' (Michael Irwin, *Henry Fielding: The Tentative Realist* [Clarendon Press, 1976], p. 119).
- (41) E. g., 'Divine command' (*Amelia*, IX, viii), 'a rule for our practice' (*ibid.*, IX, viii), 'the express commands of his Maker' (*ibid.*, XII, iii), 'the Christian law' (*ibid.*, IX, iii).
- (42) これと語り手の 'an injury is the object of anger, danger of fear, and praise of vanity; . . . goodness is the object of love.' (*ibid.*, X, iv) という言葉と、それに色欲と愛を混同している James の "... d—n me if I do not enjoy her . . . the devil take me if I don't love her more than I

ever loved a woman!"' (*ibid.*, IV, vi) という言葉を比較せよ。

(43) *Ibid.*, XI, v.

(44) *Ibid.*, IX, ii.

(45) 外に目を向けずに己の心を分析するのは‘self-enclosure’の特質であり、Fieldingの作品にはこのことを指摘している箇所が沢山あるが(Goldenの上掲書参照), *Amelia*においてこのことに触れたものには、*Amelia*がBoothに対して言う“... I believe he [James] may find faults enow of this kind in his own bosom, without searching after them among his neighbours ...” (*Amelia*, VI, vi) と語り手の言葉‘Few men, I believe, think better of others than themselves; nor do they easily allow the existence of any virtue of which they perceive no traces in their own minds ...’ (*ibid.*, VIII, viii) がある。

(46) Boothは自己の人間観の正当化のために他人の行動の観察をしているという見方もできる。See Braudy, *op. cit.*, p. 184. しかし又、彼が自分自身の行動・心理を分析して自己の人間観の証明に使っている部分もある。Boothは昔の軍隊仲間と再会し、その喜びで一時後に残して来た愛妻のことを忘れたことに関し次のように言う。

‘Booth answered that the doctorine of the passions had been always his favourite study; that he was convinced every man acted entirely from that passion which was uppermost. “Can I then think,” said he, “without entertaining the utmost contempt for myself, that any pleasure upon earth could drive the thoughts of *Amelia* one instant from my mind? ...”’ (*Amelia*, III, iv).

(47) ‘...there is no exercise of the mind of a sensible reader more pleasant than the tracing the several small and almost imperceptible links in every chain of events by which all the great actions of the world are produced.’ (*ibid.*, XII, i).

(48) Cf. ‘The journey which plays so important a part in *Joseph Andrews* and *Tom Jones* is missing.’ (Irwin, *op. cit.*, p. 125).

(49) Cf. ‘The friendlessness of his heroes is one aspect of Fielding’s com-

parative neglect of social context in his first two novels. . . . In *Amelia*, however, hero and heroin are given a much fuller social definition. . . . James and Atkinson are only two of a circle of friends from all walks of life, with whom they are in regular contact.' (*ibid.*, p. 125).

登場人物達も友情を話題にする。E. g., ' . . . Amelia entered into a long dissertation on friendship . . . ' (*Amelia*, VIII, vii); '[Mrs. Atkinson says] " . . . I have read, indeed, of Pylades and Orestes, Damon and Pythias, and other great friends of old. . . . "' (*ibid.*, VIII, vii).

- 50 Cf. 'That is almost to say, *Amelia* is a novel in the modern sense, like *Middlemarch*, *The Mayor of Casterbridge*, and *Ulysses*.' (Johnson, *op. cit.*, p. 153); 'In conception at least, *Amelia* is far closer to being a realistic novel than either of its predecessors.' (Irwin, *op. cit.*, p. 153).